

研 究 報 告

第 31 号

- ヴァンパイアはなぜ腐らないのか 森 口 大 地 (1)
——ヴァンパイアをめぐる 1730 年代ドイツ語圏の学説——
- カフカの関心と『リヒャルトとザームエル』における表現の関係性 … 山 口 知 廣 (23)
——カイザーパノラマに関する記述後の関心の変遷——
- <研究ノート>
非讃歌的な讃歌詩人ヘルダーリンを求めて 益 敏 郎 (41)
——詩と社会をめぐる戦後の議論と近代以降のピンダロス受容を
手がかりに——

2017

京都大学大学院独文研究室

『研究報告』バックナンバー

第1号(1985)

- 大川 勇：ある深層の物語の読解 — ムー
ジルの『特性のない男』研究のための序説
金子 孝吉：リルケの詩『偶像』について
田辺 玲子：関係世界の創出 — アネッテ・
フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの詩人像とそ
の世界
奥田 敏広：トーマス・マンの「モンタージュ技
法」について — 小説形式のパロディー

第2号(1986)

- 松村 朋彦：心理学と小説のあいだ — カール・
フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ
ザー』とその周辺
大川 勇：千年王国を越えて — ムージルの
『特性のない男』における〈別の状態〉の行
方
加藤 丈雄：『公子ホームブルク』について — 死
の恐怖とその超越を中心に
奥田 敏広：リオン・フォイヒトヴァンガーの小説
『成功』におけるヒトラ像について — 20
年代の証言の一つとして

第3号(1988)

- 加藤 丈雄：ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ
ムブルク』の多義性について
兵頭 俊樹：ヘルダーリンの‘Wie wenn am
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形象
をめぐって
竹本 まや：トーマス・マンの『すげかえられた
首』試論
友田 和秀：『魔の山』試論 — 主人公ハンス・
カストルプの形姿をめぐって

第4号(1990)

- 津田 保夫：『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ
シスの悲劇の観点から

- 千田 春彦：フライダングの『ベシヤイデンハイ
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて
がかりとして
宮田 眞治：覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)
千田 まや：トーマス・マンの『ファウストゥス博
士』 — デューラーの機能についての一考
案
斎藤 昌人：一カフカ像 — 『流刑地にて』をめ
ぐって

第5号(1991)

- 青地 伯水：ホーフマンスタールの『厄介な男』
における「なおざりにされた生」と「達成され
た社会性」
谷口 栄一：C. F. マイアーの『ユルク・イエナッ
チュ』について — その多義性に関する一
考察
津田 保夫：後期シラーの悲劇論に関する一考
察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に
斎藤 昌人：閉ざされる世界

第6号(1993)

- 片桐 智明：ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを
めぐって
千田 春彦：デア・シュトリッカーの『閉じ込めら
れた女房』について — 物語の重層構造
の目指すもの
福田 寛：自然模倣説における真理媒介の構
造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模
倣説の輪郭
青地 伯水：W. ヒルデスハイマーの『リープ
ローゼ・レグンデン』におけるグロテスクなも
のについての一考察

第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける
対話の概念をめぐる

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩
集』の数篇から

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二
つの方向

第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二
人の女王のドラマ

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・
ツェラーンにおける神義論の問題

第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリー
ト・ベンの場合

第10号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遙』における風景をめ
ぐる — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(1) — 散文小品『通り(1)』について

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨
堂』をめぐる

第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文
小品について

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒
情的自我〉概念の登場をめぐる

第12号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語につ
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写
について — エクブラシスの観点から

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドレーダー四十
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen
Phantasiewelt und Wirklichkeit – Essay über
Ilse Aichingers „Die größere Hoffnung“

第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm Tell*
als ästhetisches Projekt

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通
俗小説とメルヘンの再話について — 対
句法に関する試論

第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライス
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは
ネズミ族』を中心に

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』
(1996)

第15号(2001)

- 伊藤 白：『ブデンブロック家の人々』試論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から
- 池田 晋也：アルトワール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なもののあいだを浮遊する生
- 川島 隆：カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解
- 中原 香織：ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって
- 羽坂 知恵：日常の「ヒーロー」 — ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について

第16号(2002)

- 佐々木 茂人：東方ユダヤ人難民とプラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために
- 川島 隆：「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像
- 國重 裕：ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

第17号(2003)

- 池田 晋也：描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』
- 伊藤 白：ゼゼミ・ヴァイヒプロート — 『ブデンブロック家の人々』における女性像とキリスト教
- 川島 隆：ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって
- 武田 良材：クラウス・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

第18号(2004)

- 廣川 智貴：主語の文体論 — クライストの『決闘』を中心にして
- 熊谷 哲哉：言葉をめぐるたたかい — シュレーバーと雑音の世界

ASAI Maho (浅井麻帆)：Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke — Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose

- 川島 隆：『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 — カフカのシオニズム理解を手がかりに
- 伊藤 白：白いドレスのロッテ — トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像
- 武田 良材：道徳的な女たらし — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像
- 國重 裕：現代文学は「歴史」を語りうるか？ — Katrin Askan (1966~)に見るDDR文学の現在
- 書評・文献紹介

第19号(2005)

- 青木 三陽：手紙を書く騎士 — 『パルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について
- 樋口 梨々子：文学創作への萌芽としての音楽美学 — E.T.A.ホフマンの短篇『ドン・ファン』試論
- 寺井 絃子：ホーフマンスタール文学における生と絵画
- 浅井 麻帆：ウィーン分離派館とヨーゼフ・マリア・オルブリヒ — 時代と分離派が求めた合目的性
- 熊谷 哲哉：結び目としての神経 — シュレーバーにおける宇宙と身体
- 池田 あいの：手紙論としての手紙 — カフカの恋文をめぐって
- 伊藤 白：ショーシャ夫人は美しいか — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「東」
- 池田 晋也：ジャズアレンジされるヨーロッパ — ハンス・ヤノヴィッツの小説『ジャズ』
- 武田 良材：モラリストへの成長 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その二
- 書評・文献紹介

第20号(2006)

青木 三陽：歴史とフィクションの狭間で — ヴォルフラムの「原典言及」をめぐって

樋口 梨々子：E.T.A.ホフマンの『新旧の教会音楽』 — 「ロマン主義的なもの」との関連において

伊藤 白：フロイライン・エンゲルハルト — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「同性愛」

廣川 香織：ハリー・ハラーの痛む足 — ヘルマン・ヘッセの『荒野のおおかみ』における身体について

池田 晋也：文学的ジャズ表象の諸形態 — ブルーノ・フランクとフェーリクス・デールマン

武田 良材：モラリストの革命性 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その三

書評・文献紹介

第21号(2007)

寺井 紘子：芸術と芸術家 — ホーフマンスタールとリルケの場合

廣川 香織：叶えられた理想と失われた身体 — ヘッセ文学の転換期における「顔」のモチーフについて

永畑 紗織：ヨハネス・ボプロフスキーにおける闇と光 — 『ねずみのおまつり』を中心に

ヴェレーナ・ルツチュマン(川島隆 訳)：たくましい少女たち、繊細な少年たち — ヨハンナ・シュピーリの児童文学作品について

書評・文献紹介

第22号(2008)

土屋 京子：プロメテウスの火と E.T.A.ホフマンの『G町のジェズイット教会』

藤原 美沙：子どもへ向ける視線 — アイヒェンドルフの2篇の詩より

YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)：Das Verschwinden der Differenzierung in der Todesgemeinschaft in Richard Wagners *Tristan und Isolde*

浅井 麻帆：「セセッション」から「分離派」へ — 日本の Wiener Secession 受容史における訳語の変遷について

武田 良材：アンネマリー・シュヴァルツェンバハにおける反ナチス — エーリカ、クラウス・マン、そして山との関係

永畑 紗織：異教の神ペルーンとサルマチア — ボプロフスキーの短編『異教徒たちの至福』について

菅 利恵：ドイツにおける「ドイツ — トルコ」二言語教育 — 複言語主義とドイツ語教育のはざま

BID(伊藤白 訳)：『図書館が良い21の理由』書評・文献紹介

第23号(2009)

菅 利恵：愛による主体化 — シラーの劇作品をめぐる試論

土屋 京子：言語起源論と E.T.A.ホフマンの動物 — 犬ベルガンサ、猿ミロと猫ムルの言語をめぐって

藤原 美沙：詩人と「子ども」の関係について — アイヒェンドルフの小説『詩人とその仲間』より

YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)：Die Widerspiegelung des zeitgenössischen Englandbildes durch Tristan in Richard Wagners *Tristan und Isolde*

加賀 ラビ：ホーフマンスタールの『アルケステス』について

武田 良材：オリентでの自分探し — アンネマリー・シュヴァルツェンバハの『幸せの谷』

永畑 紗織：境界に立つショーペンハウアー — ボプロフスキーの短編『窓辺の若い紳士』について

第24号(2010)

- 西尾 宇広： 公／私をめぐる価値観の交錯 — クライスト『ミヒヤエル・コールハース』
土屋 京子： 博物学の夢想と冒険 — E.T.A. ホフマンの『ハイムトカーレ』と『蚤の親方』
藤原 美沙： 二人の女性と「子ども時代」の関係 — アイヒェンドルフの短篇『誘拐』より
熊谷 哲哉： カール・デュ・プレルの心霊研究における科学と発達
池田 あいの： 音楽的翻訳の可能性 — ブロート、ヤナーチェク、カフカ
宇和川 雄： イメージ世界の観相学 — 1931 年頃のベンヤミンのイメージ思考について
武田 良材： コインの亡命小説の風刺について — 長編小説『急行三等車』をめぐる議論を中心に

第25号(2011)

- 西尾 宇広： 友人たちのデモクラシー — クライスト『ヘルマンの戦い』における友情の論理
田辺 真理： E.T.A. ホフマン『ある劇場監督の奇妙な悩み』について
土屋 京子： 「わたし」について語る猫 — 自伝文学と E.T.A. ホフマンの『牡猫ムルの人生観』
麻生 陽子： 「鏡像」の詩学 — アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの『ユダヤ人のブナの木』
宇和川 雄： バラージュ、コメレル、ベンヤミンと無声映画の時代 — 「動物の身振り」のなかで
風岡 祐貴： インゲボルク・バッハマンの『出航』にみる「抵抗」の表現について

第26号(2012)

- 西尾 宇広： ロベール・ギスカールあるいは不在の君主 — クライストの民衆観と遅延された革命
土屋 京子： 闇に生きる動物の世界体験 — E.T.A. ホフマンの『廃屋』における動物磁気と共通感覚について

- 藤原 美沙： 「すべての声がともに春をつくる」 — アイヒェンドルフの『大理石像』における「子ども時代」の再現
麻生 陽子： もうひとつの農村ユートピア — ペーター・ローゼンガー『最後の人ヤーコブ』における「アメリカ」
加賀 ラビ： 20 世紀のオペラ・セリア — ホフマンスタールの『ナクスス島のアリアドネ』について
武田 良材： 子どもの反抗 — イルムガルト・コインの小説『子どもたちが一緒に遊んではならなかった女の子』
寺澤 大奈： マックス・フリッシュ『ビーダーマンと放火魔たち』 — 「教訓のない教訓劇」と経済格差の問題
山崎 明日香： ハイナー・ミュラー『エレベーターの男』の素材について — フィリップ・K・ディックの SF 小説からの影響を探る

第27号(2013)

- 藤原 美沙： 想像力・読書・教育 — アイヒェンドルフの『予感と現在』における「子ども」に関する諸問題
土屋 京子： 国際学会報告 — Konzepte des Subjekts und Konzepte der Subjektivität: 1800/1900 29.-31. August 2013 in Bielefeld

第28号(2014)

- 林 英哉： ヘルダリンにおける父と母のイメージ — 詩作と心理の「同一性という謎」
麻生 陽子： 女の芸術創造 — ドロステ＝ヒュルスホフの未完の悲劇『ベルタあるいはアルプス』における両性具有のモチーフについて
池田 晋也： 文明のなかの文学 — ハインリヒ・ハウザーの小説『海を渡る雷鳴』について

第 29 号(2015)

- 菅 由紀子： レッシング、ヘルダー、フリードリヒ・シュレーゲルのシェイクスピア批評 — アリストテレス規範とのかかわりを中心に
- 益 敏郎： 客観性をめぐるヘルダーリンとシラーの近代芸術思想 — アドルノの『パラタクシス』を導入として
- 中岡 翔子： 境界に立つ女ゴーレム — アヒム・フォン・アルニム『エジプトのイザベラ』にみるジェンダーについて
- 森口 大地： 19 世紀前半におけるヴァンピリスム — E. T. A. ホフマンに見るポトリの影響
- 籠 碧： 表現主義文学とナチス・ドイツにおける「精神疾患」イメージの類似性

第 30 号(2016)

- 菅 由紀子： ヴィーラントのシェイクスピア翻訳における「忠実さ」 — テキストへの介入についての考察
- 林 英哉： 神と人間を新たに結ぶ言語 — 18 世紀ドイツの言語起源論とヘルダーリン
- 籠 碧： アルトゥル・シュニッツラーの医学的テキストにおける精神的「健康」／「病」の境界について — ロンブローゾとクラフト＝エビングに対する書評から
- 橋本 紘樹： アドルノにおける知識人像 — 理論的観点からの再評価の試み
- 飯島 雄太郎： 死者を語る言葉 — トーマス・ベルンハルト『カルタ遊び ある遺稿』における言語懷疑について

INHALT

MORIGUCHI Daichi :	
Warum verwesen Vampire nicht?	
— Die deutschsprachigen Theorien über Vampire in den 1730er Jahren.....	(1)
YAMAGUCHI Chihiro :	
Das Verhältnis zwischen den Interessen Kafkas und den Darstellungen in <i>Richard und Samuel</i>	
— Die Änderung des Interesses Kafkas nach der Kaiserpanoramanotiz.....	(23)
<i>Entwurf</i>	
EKI Toshiro :	
Hölderlin als ‚unhymnischer‘ Hymnendichter	
— Die neuzeitliche Pindar-Rezeption und die Diskussionen der Nachkriegszeit über die Beziehung der Dichtung zur Gesellschaft	(41)

執筆者

益 敏 郎	toshiro.e6413@gmail.com	(日本学術振興会特別研究員(DC1))
森 口 大 地	aidich5@gmail.com	(京都大学大学院博士後期課程)
山 口 知 廣	y.chihiro0804@gmail.com	(京都大学大学院博士後期課程)

第 31 号編集長

益 敏 郎	toshiro.e6413@gmail.com	(日本学術振興会特別研究員(DC1))
-------	-------------------------	---------------------

第 31 号論文査読委員

川 島 隆	(京都大学准教授)
菅 利 恵	(三重大学准教授)
土 屋 京 子	(高知大学講師)
松 村 朋 彦	(京都大学教授)
吉 田 孝 夫	(奈良女子大学教授)
	(五十音順)

研究報告 第 31 号

非売品

2018 年 1 月 発行

発行所 京都大学大学院独文研究室 研究報告 刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

TEL 075-753-2826

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入

石不動之町 677-2